

カワズ
俺と蛙さんの
異世界放浪記
10



スケさん

竜族の青年。
女の子に目がなく、
スケベである。

トンボ

妖精郷に住む下っ端妖精。
小さいが態度はデカい。

鎧さん

マオちゃんが誇る四天王の
ひとり。見かけによらず
アイドル好き。

マオちゃん

平和な異世界に
突如誕生した魔王。
オネエ系。

カワズさん

自身の命と引き換えに太郎を
召喚した魔法使い(500歳)。
太郎によってカエルの姿で
蘇生させられる。

紅野太郎

本作の主人公。カワズさんに
よって異世界へと召喚された。
魔力は800万1000。

セーラー戦士

地球へ戻るため、果てしない旅
を続ける美少女。

カニカマ君

異世界から召喚された
中学生勇者。とある事件が
きっかけでこのあだ名に。

主な
登場人物



CHAT ROOM



スケ

メール見ましたか！



クイーン

こんにちは！ クイーンだよ



マオちゃん

見たわよ！ 何なのかしらね！ ちょっとわくわくする！



薔薇の君

空の上にタロイモさんを^{おびや}脅かす何者かがいるかもって話だけど、一体何がいるんだろう？



マオちゃん

地図見た？ ここ空白の荒野でしょ？
何にもないわよね？



スケ

ああ、それなら、その荒野の上に
何かとんでもないのがいるかもって話をしましたよ？



薔薇の君

そこのところkws k



スケ

詳しくって言われても、世間話程度の雑談ですよ。そういえば、やけに話は具体的だったかな？ でっかい魔石があるかもしれないとか、神がいるかもとかなんとか



マオちゃん

なるほど、神ね……



クイーン

何かわかるの？

CHAT ROOM



スケ

おお！ 知ってます！ 知ってますよ！
確かにすごい美人でした！



薔薇の君

みんな知っている感じだね



クイーン

なかなか活発な娘だったからな。その娘が何かのトラブル
に巻き込まれて行方不明になったらしい



マオちゃん

それをタローちゃんが助けに行ったってわけなのね！
いいじゃない！



スケ

なんということでしょう！
美少女が悪党に捕らえられ、救出に……。
大変なことじゃないですか。うらやましい！



薔薇の君

本音が出るよスケさん。言いたいことはわかるけれど



スケ

でしょう!? 私の^{あこが}憧れるシチュエーション上位ですよ！
いやいや……。まあ実際やられると大変ですけどね？



マオちゃん

助け出される方も憧れるわね、そういうの



薔薇の君

カワズさんのメールだと、その神様に
彼女が捕らわれたってことなんだろうね



スケ

そうです！
そして件名を見るに、タロイモさんが本気出すと！

CHAT ROOM



マオちゃん

ちょっとね、でも来るべき時^{きた}が来ちゃったかも？



クイーン

なんだそれ！ w 超怖いんですけどwww



スケ

敵が誰だろうとそんなことはどうでもいいんです！
問題はもう一つのお相手の方ですよ！



マオちゃん

そうねそうね！ 確かにそうよ！



薔薇の君

いるのかいないのか定かじゃない相手よりもそっちだよ



クイーン

ふふん、それなら私
重要な情報をゲットしていると思われ



スケ

本当ですか！



クイーン

もちのロンよ！ 今回タロイモさんが追っていったのは
あいつがセーラー戦士と呼ぶ人間なのだよ！



マオちゃん

ああ、いたわね
一度HPで特集組んだ、あのカッコいい系の



薔薇の君

彼女なら僕も知っているよ！ 人間だけど、顔立ちはエル
フに似ていたから印象的だった！

CHAT ROOM



スケ

では準備完了です！ 行ってきます！

—— スケさんがログアウトしました ——



薔薇の君

でも実況見るだけっていうのもなあ
スケさんだけなのも、少し心配だ



クイーン

ちょっとな。でも今回は事情が不明すぎる、なんとなく察
している奴が様子を見てきてくれないかなかな？
！ω・`）チラ



マオちゃん

はは、いいわよ。私も思うところもあるし



クイーン

さすがマオちゃんさん、話がわかる！



薔薇の君

思い切りましたねー。事情がわかったら僕らにも教えてね



マオちゃん

はいはい、じゃあ行ってくるわ

—— マオちゃんさんがログアウトしました ——



クイーン

……まあここだけの話、何がどうなってもタロイモさんに
大した進展があるとは思えないんだけどねw



薔薇の君

それ、マオちゃん達が行く前に言ってあげなよw

CHAT ROOM



クイーン

確かにこれまでにないほど気合いが入っていた気がする



マオちゃん

タロイモさんが魔力温存したいって相当よね、実際



スケ

こうしてはいられません！
ちょっと行って実況してきます！



薔薇の君

健闘を祈る！



クイーン

よく言った！∠（`・ω・`）



薔薇の君

メールはタロイモさんの知り合いに一斉送信されてるんだ
よね？ もっと拡散させた方がいいかな？



スケ

それはもうやっておきました



クイーン

それはもうやった



マオちゃん

それはやっておいたわよ



薔薇の君

w

プロローグ

「ねえ母さん、母さん。魔法使いつて本当にいるのかな？」

それは曖昧で、イメージに霞がかかるほど古い記憶だった。

そうだ、あれは確か童話の絵本を読んでいたときだったと思う。

いたらいいな、そんなふうに考えながら、幼い俺は尋ねた。

大した考えもない思い付きの質問だったが、それを聞いた母は笑い、俺の頭をなでて答えた。

「もちろんいるわよ？ だって母さん、魔法使いだもん」

「ホントに！」

「本当よ。お母さん嘘つかない」

正直子供心にも、これは嘘だろうなと思った。

ただ、自分のことを魔法使いだと言った母さんがものすごく自信満々だったから、まだ汚れていなかった当時の俺は、ちよつとは信じて喜んでいたのである。

「そうね……、いい機会だから教えてあげる。貴方のおじいちゃんもすごい魔法使いだつたのよ。

もしこの先、貴方がとつても不思議な目に遭うようなことがあったら、貴方のおじいちゃんを探し

てみなさい。その人の名前はね——」

1

「はっ……、走馬灯か？ 今のがそうなのか？」

遠のいていた意識が戻ってきた。

地面に放り出されて転がっていた俺、紅野太郎は、ぼんやりとする頭で状況を整理した。

俺は確か、空飛ぶ船で、「謎の星」に突っ込んだんだった。

いやあ驚いた。ジェットコースターくらいを想定していたのだが、甘すぎたらしい。

赤く燃える岩塊が、火山が噴火したかのごとく飛び交う中、敵意むき出しの防衛網を突っ切って中央突破。そんなこと正気でやるもんじゃない。

ぐしゃぐしゃになってしまった黒髪を触ると、髪の毛に引っ付いていたピクシーのトンボを見つけた。

「……トンボちゃん生きてる？」

「うにゅー……。なんとかー」

トンボの方も返事をする余裕はあるみたいだ。

俺は目を閉じ、軽く深呼吸する。

よし、もう大丈夫。

気合いを入れて身を起こす。するとそこにあったのは、蛙^{かえるがお}顔のアップだった。

咄^{どつさ}嗟に俺が放ったのは、ツツパリである。

「どすこい！」

「なぜじゃー！」

あっさりかわされたところで我に返った俺は、その手をおもむろに頭の後ろに持っていつてごまかした。

「……いやあ懐かしいわ、この感じ。相変わらず心臓に悪い」

「え？ 今なんでどつこうとした？ わざとじゃろ？ わざとだつて言ってもいいぞ？ わざとじゃなけりや、あんなえぐりこむような一撃は出んよな？」

ゆらりとした動きで、カワズさんが妙にすごみのある拳法チックな構えを取ったので、俺はすぐに謝った。

「ゴメンゴメン……。いや、気が遠くなつて、いきなりカワズさんのどアップだったから、普通にびっくりした」

「あのくらいで気が遠くなるとか、肝っ玉小さすぎじゃろ」

「いや、肝っ玉は関係なくないか？ カワズさんの顔のおかげで頭ははつきりしたけどさ……。正

直死ぬかと思つたわ」

「安心せい。世界が滅んでもお前は助かる」

すげなく俺の文句をはねのけたカワズさんだったが、そもそも着陸にしくじったのは、この蛙である。

「まあ……。死ぬかと思つた一番の原因は、ちゃんと着陸させなかったからだけだな。がっかりだわ、カワズさん」

「そうだよ！ 危うくぺらっぺらになるところだったよ！」

トンボも、人の髪の毛を引っ張りながら立腹だ。

だが俺達の非難にひるむことなく、カワズさんはジト目で言う。

「……死ぬどころか、かすり傷一つ負ってないじゃろうが」

「……ええまあ。そう、なんですけどね」

俺は基本、身の守りの備えだけは常に行っている。だからトンボも俺の頭の上に隠れるのだし。

俺達は星の結界に突入すると、急に重力に引っぱられて墜落した。

そうしてやって来た空に浮かぶ謎の星の風景は、木々の生い茂る密林だった。

思えば遠くに来たものである。

セーラー戦士を追ってここまで来たが、それにはいろんな人の協力があった。

番人の天使を引き付けてくれた巨人達。そして殿しんがを買って出たデビニャンとエルエルの悪魔天使コンビが、今も爆音の収まらない戦場で戦っていると思うと落ち着かない。

「……任せて来てしまったけど、大丈夫だろうか？」

そう俺は心配するが、カワズさんにあつさりと言われてしまった。

「大丈夫じゃよ。誰も簡単にやられはせんさ。今は好意に甘えておけ。お前さんには、お前さんの役目がある。しっかり魔力の温存に努めておけよな？」

「……ん、……いや、わかった。あとでお礼を言うことにするよ」

「そうしとけ。みんな好きでやつとることじゃ」

「そうだね。助かる」

カワズさんにはつきり言われて、ようやく俺も目が覚めた。

そもそも助けに行くと決めたのは俺だ。その時点で危険なのはわかっていた。

それでも協力してもらえているのだから、感謝する以外はやめておこう。

「ところで、ナイトさんとクマ衛門は？ 姿が見えないけど？」

一緒にここまで来たはずの二人のダークエルフがいないことに気がついて、俺はカワズさんに尋ねた。

まさかどこかに吹っ飛んでしまったかと思っただが、そういうわけではないようだ。

「あの二人はもう偵察に出ておるよ。しばし待て」

「おお！ さすがだ！」

あの派手な墜落のあとに迅速な行動が取れるとは、さすがナイトさん達である。

二人に任せておけばセーラー戦士の向かった場所くらいすぐに見つけてきそうだが、ただ待っているというのも申し訳ない。俺はさっそく頭の上のトンボに尋ねた。

「ここからはトンボも頼りだぞ？ セーラー戦士のいそうなところを教えてくださいよ」

「え？ わたし？」

トンボは以前、セーラー戦士とともにここに来た。つまりセーラー戦士の最後の目撃者である。持っていたアイテムで運良く逃げ出してきたそうだが、自分達がたどった道くらい覚えているだろう。

結構期待していたのだが、しかしトンボは、頭の上のゴーグルを指でいじって考え込むばかり。そしてようやく口を開いた。

「……えっとね、確か……。そう！ でっかい扉があったよ！ その前に竜りゅうっぽいのがいた……。気がする」

微妙に曖昧なトンボだったが、漠然ぼくぜんながらも話された内容は、またとんでもないものだった。

「竜りゅうって……、あの竜？」

「うん！ でもアレをどうにかするのはわりと簡単だったかな？ わたしのマジカル☆トンボソー
ドで、一撃のもとに粉碎したからね！ 今回も余裕でしょ！」

剣を振る身振りを交えて、自分の武勇伝だけはしつかり語るトンボである。

ちなみにマジカル☆トンボソードとは、抜けばどんな勝負にも必ず勝てる、必勝の魔剣のことだ。そんな魔剣を持ち出したことで、セーラー戦士とトンボは、未知のダンジョンの奥まで進むことができたわけだが、トンボはその魔剣が壊れてしまったことを忘れていたらしい。

「……今ないだろ、マジカル☆トンボセット。同じ感覚でやったらたぶん死ぬよ?」

一応、念のため忠告しておく。するとトンボは、そんなことはわかっているとばかりに頷いて、今度はカワズさんのところへ飛んで行った。

「そうだけども! ビビる必要はないよね! ね? カワズさん! 必殺の拳に期待しているからね! わたしのためにがんばって!」

なるほど、魔剣の代わりは今回もあるということか。納得した。

「嫌じゃよ。あんまり調子に乗っておるとゴーグル割るぞ?」

「ふふん。あら? こわいのかな? わたしは全部一回やつつけたんだからね! それともカワズさんにはできないのかなあ? ちょっと難しいかもな!」

「……」

トンボもようやく調子が出てきたようだなによりだ。

じゃれ合うカワズさんとトンボを放っておいて、俺はトンボから教えられた情報を整理しながら唸った。

「ふーむ、竜か」

竜はこっちの世界で相当な強さを誇る生物である。どんな種類だとしても、俺抜きでは簡単に倒せないのは確かだろう。

謎の星にここまで本格的な防御網が存在しているなら、もう少し準備を整えてくるべきだったかもしれないと、今さらながらに後悔した。

「あーあれだな。黒歴史だからって葬^{ほうじ}った『マジカル☆トンボちゃん・ジャスティス』の封印を解いてくるべきだったか?」

「まだそんなものが!」

おっと、うっかりぼろつと秘密を漏らしてしまった。

慌てて口を閉じたがもう遅い。二人の食いつきが思いのほかよいので、これ以上突っ込まれると、またいらないぼろが出そうである。

どう話を逸らそうかと考えていたら、ちょうどいいタイミングで上空を大きな影が横切った。

「やば……、噂の竜かな?」

身構える俺にトンボが告げる。

「たぶん違うよ。登場の仕方が違うもん」

「……登場の仕方って何だ?」

俺は手のひらをかざして、じつと空を観察する。

木々をなぎ倒し、粉塵を巻き上げるド派手な登場である。空の彼方からこちらにまっすぐ降りてきた黒い巨竜は、俺達の目の前に着地した。

だが当人は登場の荒々しさとはまったく印象が違う、さわやかな声で挨拶してきた。

「おお！ タロー殿！ 遅くなりました！」

「ああ！ スケさん！ 来てくれたのか！」

スケさんの姿を見た俺は、拳を突き出しフィストバンプを交わす。竜の姿でやられると押しつぶされそうだが、そんなことはまったく気にならない。

俺はスケさんが来てくれたことに感動して胸が熱くなった。

「まさか本当にこんなところまで来てくれる奴がいるとは思わなかった」

もはやここからは何が起こるかわからないし、ひよっとしたら帰れなくなるかもしれない。だがスケさんは、あくまで自然体でうれしそうに言ってくれた。

「当たり前ではないですか！ タロー殿の人生の勝負時！ 友人としては放っておけますまい！」

「人生の勝負時？ 何のことだかさっぱりわからないけど、とにかく感動した！ そうだ！ そんな君に、これを！」

思わず泣きそうになったのをごまかすために、俺は手のひらサイズのガラス玉をスケさんに差し出した。

「何ですこれ？」



困惑顔を浮かべてそれを爪の先で摘み上げたスケさんは、ガラス玉から浮かび上がった3D映像を見てクワツと目を見開く。

「こ、これは！」

浮かび上がった光の中では、小さな女の子が可愛く歌い、踊っている。

そう、これは、今人気絶頂のネットアイドル！少女Bの立体映像投射装置（仮）である。

手を震わせるスケさんに、俺はまだ流通させていないこのレアアイテムについて解説してあげた。「こないだ思いついて作ってみたのだ。コンサートの映像を鑑賞できるから、よかつたらもらってやってくれい」

「ここまで小型化できようとは……。こ、これは危険なのでは!? ローアングルから見ようものなら……」

「いけない。紳士はその程度のことを取り乱さない。いいね？」

「……心得ました！一生ついていきます！」

そんな心温まるやり取りだったのに、周囲から基本白い目で見られた。

ちなみに少女Bがどんなに短いスカートを穿いていても、見えそうで絶対見えないのが仕様になっっているので健全である。

「……で、人生の勝負時？ ってなに？」

俺はうつすらとにじんだ感動の涙をぬぐいながらスケさんに尋ねた。

ところがスケさんから返ってきたのは、見覚えのあるいやらしい笑顔だったものだから、この時点で嫌な予感がした。

「ふふふのふ！ わかりますよ！ 普段浮いた話ありませんからな、タロー殿は！ 危うく男性が好きなのか、と勘ぐってしまうほどでしたが、安心しました！」

「そんな疑惑があつたのかよ、大好きだよ女の子！ つうかなんだよ、そのハイテンション！」

「またまたー。私以上に盛り上がっているくせにー。とはいえ、メールが一斉送信された今、ネット中で祭りですよ？」

「な、なにそれ？」

にこやかに言うスケさんの台詞には、胃痛の種になりそうな言葉がそこかしこにちりばめてあって、俺は困惑した。

この状況のどこに、祭りになることがあるのかと？

聞きたくなかったが、聞かないわけにもいかないだろう。

「……ちなみにメールの内容は？」

俺がおそろおそろ尋ねると、スケさんは言った。

「『魔法使いが女を追いかけて告_こりに行ったぞー』ですか？」

「……さっきは感動して損したよ！ おいカワズこの野郎！ なんてことしてくれたんだ！」

これまでの感動が一気に崩れ去った瞬間だった。

「ええー、似たようなもんじゃろー？」

「ぜんっぜん！ 違うから！」

カワズさんは反省する素振りなど少しも見せず、口笛を吹きながら楽しそうに自供してくるから、たまったものではない。

どうやらカワズさんに連絡を任せたのが、そもそも間違いだっらしい。

打ちひしがれた俺は、己の馬鹿さ加減に絶望した。

落ち込む俺を、カワズさんとスケさんがうれしそうに茶化してくる。

「たぶんもう何人かは来てくれるんじゃないかの？ ザックリ説明も付けておいたし」

「大丈夫ですよ！ 恥ずかしがっていは始まりません、ロマンスは！ それで、相手はやっぱり彼女なんですか？ 早く実況したいのですが」

「だまらっしゃい！ させるかそんなもん！ あーもう俺の感動を返せよ！ つーか、スケさん含めてこのあと誰が助けに来て、手放して喜ばなくなったでしょうが！」

今後の展開を想像して、俺は頭を抱えた。

普通はこんなばかばかしいメールじゃスルーされそうなのだが、うまい具合に燃料になってしまったようだ。

ためらうどころか、むしろ嬉々として命を懸けに来るであろう面子めんつがあっさり想像できるのは恐ろしいところである。

あいつらならたぶん来る。しかもかなりの高確率でだ。その代表格であるスケさんは実にやる気に満ちていた。

「はっはっは、心配せずとも露ひそかに専念させていただきますよ！ タロー殿は安心して、自らの戦場で思いのたけをぶつけていただきたい！」

「うるさいよ！ そもそも告白とかじゃねーから！ もう手遅れかもしれないですけどね！」

この誤解は簡単には解けそうにないな。

こりゃあセーラー戦士を助け出すことができて、こんな騒ぎになっていることを知った彼女が襲いかかってくるかもしれない……。そのときは責任を取ってもらって、カワズさんバリアーでも発動しようと思う。

「うう……。まったくろくなことしない蛙だよ」

俺が諦めの境地に達していると、今にも死にそうな声がずいぶん高い位置から聞こえてきた。

「今度はいったい何事ですか……」

弱々しいその声は、スケさんの背中からの辺りから聞こえてきているらしい。

「あー。ほかに誰か連れて来たんだ……」

スケさんに確認すると、どうやらスケさんも忘れていたようだった。

「おおっとこれはうっかりです！ 最速でぶっ飛ばして来ましたものでして、さすがに死んでないとは思いますが……」

きつと声の主も俺を冷やかに来たんだろうが、一体誰だろう？

スケさんがしゃがみ込むと、背中に乗せられていた人影が顔を出した。

だけど、そこにいた顔なじみの三人組は、楽しんでいっているという風ではなかった。

スケさんの背中に乗っていたのは、高所での高速飛行で凍える寸前になっていたカニカマ君三人組だった。

解凍されたカニカマ君というのは、別に魚肉の加工食品とかではなく、実は勇者である。

地球から召喚されて、この世界で勇者をやっている中学生の彼に、俺は事情を説明した。

「……というわけで、セーラー戦士を助けに来たわけなんだけれども」

「は、はあ」

いまいち状況が呑み込めていないらしいカニカマ君に、今度は俺から説明を求める。

「それにしても一体どうしたんだよ？ まさか半分冷凍されてる状態で再会するとは思わなかったよ？」

「僕らだって、予想だにしていまませんでしたよ……」

鼻水をすすり上げるカニカマ君。どうやら俺を冷やかすどころか、ここに来るつもりもなかったみたいだった。

どうということかとスケさんに視線を向けたが、スケさんにも特に何か考えがあったわけではない

らしい。

「いや。ちょうど魔王の島に渡るためのアイテムが欲しいと谷を訪ねて来ていたようでして。うちの若手相手に苦戦していたところを、せっかくなんで拾って来たわけなんです」

「拾って来たんかい」

「はい。知り合いじゃないかなと」

「あー、まあ知り合いだけだよ」

「やはりですか。おかしなしゃべる剣を使っているから、そうだろうと思いましたよ」

「おー、……聖剣カニカマ、思わぬところで大活躍」

俺は気の毒になって、カニカマ君一行に視線を向けた。

白い鎧で武装した中学生、カニカマ君。彼を中心としたパーティは神聖ヴァナリア発の、現勇者パーティということになっている。

頭のとっぺんから足の先まで白で統一した少女と、猫耳と尻尾の生えた獣人の女の子という個性的な面々で打倒魔王を目指している。

ちなみに俺は、勇者をカニカマ君、白い少女を巫女ちゃん、猫の獣人をネコミミさんと呼んでいる。

さっそく噛み付いてきたのは、巫女ちゃんだった。

「死ぬかと思いましたわよ！ いきなりこのでっかい竜が現れたときは！」

さらにまだふらふらしているカニカマ君とネコミミさんが続く。

「……顔が広いんですね」

「うにゃあ……、またあんたにゃのか」

彼らのクレームはともかく、事情はおおよそわかった。俺達が起こした騒動に巻き込まれたという事なんだろう。

巻き込んでおいてこう言うのは何だが、なんとも気の毒としか言いようがない。

「いや非常に申し訳ない。それで、えーっと……どうしよつか？」

謝ってみたものの、少し困った状況である。

「何やらここは危険なおいがプンプンします！ 血が騒ぎますな！」

一方でスケさんは、もう完全に戦う気満々である。

カニカマ君達を元の場所に送って来てくれと言ったところで、絶対引き受けないだろう。

そしてこちらにも送り返す余力などない。

いい考えも浮かばずに言葉に詰まった俺は、ひとまず提案してみることにした。

「……あー、カニカマ君、悪いけどこのまま来てもらってもいい？」

「は、はあ」

スケさんだからここまで来られたが、空ではエルエルとデビニャンががんばっていて、銃撃と魔法の爆発が広がっている。

簡単には帰れないだろうし、付き合ってもらう方が安全だろう。

しばらくして、偵察に出ていたナイトさんとクマ衛門くまもんがなかなかいいタイミングで戻ってくる。

もちろん二人にも成果はあったようだった。

「向こうに扉らしきものがありました」

「がう」

「ほらね！」

ダークエルフコンビの報告に、トンボが歓声を上げた。

さっきのトンボの口ぶりからいつてあんまり信用していなかったのだが、扉があるというのなら行ってみるしかなかったわけだ。

ダークエルフコンビの案内で先に進み、扉を見つけたトンボが叫ぶ。

「あ！ ほらここだよ！」

「ほほう……、これはまた」

その扉に見覚えがあるらしく、トンボは、ホラホラと何度も指差す。

金属製の巨大な扉は、大きさで言えば竜のスケさんでもぐり抜けられそうなほどで、やたらと大掛かりだった。

扉の全面に装飾されている竜もやけにリアルである。それがスケさんと変わらない大きさで、

でーんとくつついているんだから、どんなこだわりなのかと作者に尋ねてみたかった。

「ここかー……、ずいぶんでっかいんだね」

「そりゃそうだよ、見ていればわかると思うけど」

トンボの言葉の意味するところは、まさに見ていればわかった。

一定の距離まで近づくと、扉に刻まれていた竜の装飾がぬるりと動き出したのだ。

そのまま扉そのものが形作って現れたメタルな竜は、赤い瞳をギリリと危険に輝かせ、侵入者である俺達を見下ろした。

「ははっ……、まさかメタル製の竜とは恐れ入ったね。動くんだ、あれ」

「うん。最初見たときは、わたしも驚いたものだよ」

「……先に言っただけじゃなかったぜ、トンボちゃん」

「えー。いいじゃん。ビックリしたでしょ？」

「そりゃしたけども」

ただでさえメタルドラゴンの迫力は作り物とは思えないほど真に迫っているのだから、心の準備くらいさせてほしかった。

「トンボちゃんマジでこんなのと戦ったの？ チャレンジャーすぎるだろ」

「マジカルモードのわたしは、何人^{なんびと}たりとも止められないのさ！」

「そうですか……」

こちらを凝視するメタルドラゴンを前に、トンボは勝ったときのことを思い出したのか、興奮して頬が赤い。

しかしトンボ以上に、興奮している人……、というか竜がいた。

「ほほう！ 私の前で竜の姿を取るとは生意気な！ タロー殿、ここは私に任せていただきたい！」

「……う、うん」

戦意を見せるスケさんの荒々しい迫力は、近くにいただけで鳥肌が立ちそうである。

俺は思い出したように、カニカマ君達に確認しておいた。

「それじゃあ君らはどうする？ 付いて来るのが嫌ならここで待つてもらってもいいけど」

スケさんは言動こそアレだが、真正正銘、最強クラスの竜なのは間違いない。

ここにいるのも安全とは言いがたいが、スケさんがいるなら大丈夫だろう。

たぶん「待っている」と答えると思っていたのだが、カニカマ君は、どういうわけかその選択肢は選ばないようだった。

「……いえ、乗りかかった船です。一緒に行かせてください。貴方にはなんだかんだお世話になっていますから、ここで借りを返しておきます」

「わたくしも、勇者様がそう言うのなら、お付き合いいたしますわ」

「どうせこうなったら、どうあっても巻き込まれる運命にや。女は諦めが肝心にな」
パーティー同、付いて来るらしい。さすが勇者君、マジ勇者である。